



コーちゃん・オーちゃんの 「見つけた！豊岡元気人」



自分たちの住む地域は

自分たちで守る！

地域の防災・減災のために、消防団で活躍する元気な3兄弟を紹介します。

おあ
太田

たけし
武志さん(34歳)・成紀さん(32歳)・

けいすけ
圭亮さん(28歳)江原区(日高地域)



日高消防団初出式(4月6日)で表彰



表彰状と記念品、表彰名簿



(左から)圭亮さん、成紀さん、武志さん

消防団120年・自治体消防65周年記念大会で日本消防協会会長表彰「消防団員家族表彰(注1)」を受賞したのが、太田武志さん・成紀さん・圭亮さんの「太田3兄弟」です。

地域貢献

火災や事故、災害などが発生した際に、消火活動などを実施する消防団。団員のほとんどは、他の職業などに就いている市民で構成されており、活動はボランティア精神で成り立っています。豊岡市には、地域ごとに六つの消防団があります。全体で、約2100人の団員が、消火活動や消防訓練、水防訓練、啓発活動などに当たっています。

太田3兄弟は、豊岡市日高消防団第6分団第1部に所属。部長を務める武志さんは、入団11年目。部では指導的な役割を担っています。今回の受章を「父と母が私たちを元気に産んでくれたことに感謝したい。地域に貢献したい」と振り返ります。

担い手に危機感

家から代表を出すという考えもある消防団。武志さんは「兄弟で入団することは珍し

い。しかし、意識の変化や人員不足で、私たちの団には欠員が出ている。家から1人とは言ってられない。団員には勤め人が多く、平日の日中の火災に出動できる団員が少なく」と後継者の減少に危機感を持っています。

入団して間もない成紀さんと圭亮さん。「サイレンが鳴ると緊張感が走る。火災の出動実績は少ないが、訓練をしっかり積んで、後輩を指導できるようにになりたい」と身を引き締めます。

有事に備える訓練

武志さんは、自身の経験から「けがをしないためにも訓練が必要。入団当初、夜間の消火活動で、石垣から落ちてけがをしたことがあった。团长をはじめ、周りの方に迷惑を掛けた。また、火元を前にすると、どうしても火元に近づいてしまう。煙で息ができなくなることもあり、引く勇気も必要」と、後輩を指導しています。

本年度は、日高消防団で、2年に1回の操作大会が開催されます。各分団が、ポンプの機関操作や動作の正確さ・

スピードを競います。武志さんは入団4年目に選手になったことで、消防への関心が高まり、訓練の大切さを実感しました。「優勝を目指して、チームを引っ張っていきたい。選手以外の団員は、選手を支える次の大会に向け、技術を盗んでほしい」と意気込みます。

家族・地域に支えられて

「サイレンが鳴ると、消防服の準備などを手伝ってくれ。消火活動中は家を守ってもらい、安心して出動できる」と妻に感謝する武志さん。消防の魅力や「近所の方と一緒に行動するいい機会。知り合いも増えて、みんなで地域に貢献できる」と感じています。

太田3兄弟は「生まれ育った江原が好き。子どものころにお世話になった方も多い。これからは、私たちが地域を支えて、守っていききたい。消防団を頼りにして、いろいろな活動で利用してほしい」と地域への愛着を語ります。

(注1)対象：2親等以内(子・兄弟)の現職消防団員3人以上を有する家族。消防団勤続年数が最も長い者が5年に満たない場合は除く

ま ち の 話 題

季節の生菓子を作ってみた(◇)◇
「城崎温泉泊覧会」で発見！体感！

「城崎温泉泊覧会」(同実行委員会主催。愛称・城崎オンパク)が5月9日から6月8日まで城崎地域の各所を会場に繰り広げられました。地域のイベントといえは、一つの場所に集まって行うことが多いのですが、「オンパク」は地元(なまわ)の生業をイベント化。写真店主や住職ら多彩な講師による体験型イベントで、関西では初開催だそうです。

和菓子作り初体験の河本八重子さん(日高町鶴岡)は「丸めて、布巾で絞って花の形にするとところが難しかった」と、完成の喜びをうれしそうに話していました。



▲シヨウブを頭に巻いて、元気よく返事をする園児たち

合橋認定こども園端午の節句

病气やけがに負けないぞ！

6月5日、合橋認定こども園(園児43人)で、端午の節句の行事が開催されました。端午の節句は、強い香気で厄を払う「シヨウブ」や「ヨモギ」を軒につるしたり、しょうぶ湯に入ること無病息災を願うものです。

当日は雨天のため、園児たちは自分たちで作ったこいのぼりを飾ることはできませんでしたが、こいのぼりの歌を歌ったり、職員による劇を見たりして、行事を楽しんでいました。最後に園長先生が「シヨウブは家のお風呂に入れてしょうぶ湯にしましょう」と呼び掛けていました。



▲「形が崩れていても味は一緒です」と和菓子職人。アヤメとバラの和菓子作りを体験した

笑顔の輪

初夏の風物詩・ホタル。心が癒される
たんとう夢ホタルの会(但東)

「たんとう夢ホタルの会」は、平成10年に設立され、ホタルの生息活動を続けています。会員は約25人で、但東地域の相田区、小谷区、正法寺区の方で構成されています。

福田さんは「ホタルのことが口コミで広がり、遠方から見に来られたりすると、うれしいし、活動していてやりがいを感じる」と話します。活動する上で、一番大切なことは生息環境を維持することです。過去、一番のピンチは平成16年の台風23号のときでした。ホタルの幼虫は、川の中流域に住み、カワニナを捕食します。台風で、このカワニナを含めて、幼虫の生息環境がほとんど流されてしまいました。福田さんは「天災はどうしようもない」と話します。しかし、会員の中には、ホタルを養殖し、毎年放流する方もいたり、その後の会員の地道な努力が実を結び、近年ようやくホタルの数が増えてきました。

ホタルの見頃は、6月。特に気温が13度以上ある晴れた日で、湿度も高い日はよく見られるとのこと。会長の福田 茂さんは、川沿いにホタルが光っているさまを「ランブが連なってるもっているよう」と例えます。一時は、夜でも観賞場所近くの道路に車の渋滞ができていました。

福田さんは「長く活動を続けていきたい。また、地域活性化の役にも立てれば」と抱負を語ります。



◀夜になるとホタルが飛び交う

